

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第207号（2024年10月秋号）

常世の風に吹かれて呟いて（13） 白井啓治

（故白井啓治氏の9年前（2015年）の記事から

一部を抜粋して連載します。）

・立待の月も常よりは大きく 蟋蟀の声

昨日は十六夜（いざよい）の月。今夜は立待の月。明日は居待の月。明後日は臥し待ちの月。

何とも秋の夜にピツタリと来る月の呼び方かと古代の先人たちの感性の豊かさには恐れ入る。

虫達の声も月の出に合わせるかのように高音を張るのだから不思議である。

いざ宵が来ると思う時に顔を出す月だから十六をいざと詠むなど如何にも風流。忽ちを立ち待ちと詠むのも風流な生活感としか言いようがない。ただただ先人達の風流の文化度には感服である。

お犬様もお猫様も風流とは団子のことだと理解している。これは現実感たっぷりの実相の風流と言えるだろう。糖尿病になって酒を断ったが、こんな夜にはやはりお銚子一本の酒は月と酌みかわしたいものである。ただ今、団子に満足したお犬様は机の下で大酩をかいてござる。

新人お猫様もシンデレラベッドに丸くなっている。平安也、平安也。

・秋風の窓を激しく叩いて 虫の声もなく

今はようやく収まったようであるが、朝から風の風も結構冷たくなっている。陽だまりになっ

る廊下は真夏並みの暑さである。久し振りに三人での寝ったり午後となったが、雫が家族になって三人の寝ったりは初めてではないだろうか。耳ちやんと寝たりでは川の字になったのだが、雫さんとの寝たりは川の字にはならない。お犬様、お猫様は丸くなつての寝たりなので、ちやうど%のような形で寝たりになる。これから益々陽が斜行してくると廊下の陽だまりは温室状態になり、寝ったり天国になる。



（絵：兼平智恵子）

・秋の陽の中に佇んで 何にもない何にもない
秋の陽だまりにぼんやりと佇んで、今日は本当に何にもないな、としみじみと思った。これって、隠居爺しか感じない事なのだろうな。何もやる事がなくてポーツとしているわけではない。

隠居爺さんのくせにやらなければならない事は山ほどある。

一日10時間程は机に座り、パソコンを敵のように睨みつけて何かしらの文を書き続けている。脚本家などと言う怠惰な仕事を選択したが為

ふるさと風の会会員募集中!

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、1・4・7・10月初めに会報作りを兼ねた懇親会と各月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額1,500円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

木下明男 090-4715-5527 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659 木村進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0018 石岡市若松 1-5-38（木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

それで飯が食えるようになって以来45〜46年ほど取材等で出かけない時は一日14〜15時間机に座りっぱなしの人生である。机の椅子でない時は飲み屋の椅子であった。その所為で糖尿病などと言う嬉しいお友達が出来てしまった。お友達の事を考えると、せっせと動き回らなければならぬのだけれど、庭いじりすら「せっせ：」程度の動き回りしかない。それなのに最近はずっと「何にもない、何にもない」と思うようになった。今日も陽だまりに立った途端「何にもない、何にもない」と思ってしまった。お犬様やお猫様も陽だまりに一日寝たりしているが、彼等も「何にもない」なんてことを思っているのかな。

常陸国府跡

兼平智恵子

このところ、ふるさと歴史館に、国府巡りと称して、主に県外の方々の、ご来館が目立つようになりました。皆さん一様に、「こんなに深い歴史があるのに、なぜPRしないんでしょう」とおっしゃいます。

大化の改新(六四五)後、多珂・久慈・那賀・新治・白壁・筑波・河内・信太・茨城・行方・鹿島の十一郡で常陸国が誕生し、常陸国全体をまとめる国府(国の役所または役所の所在地)は茨城郡内、現在の石岡市に設置され、以後戦国時代(一四六七〜一五六八)まで石岡市は常陸国の中心地でした。

令和六年四月十日〜七月七日「ふるさと歴史館第三六回企画展 常陸国府跡」にて展示された資料をもとに紹介します。



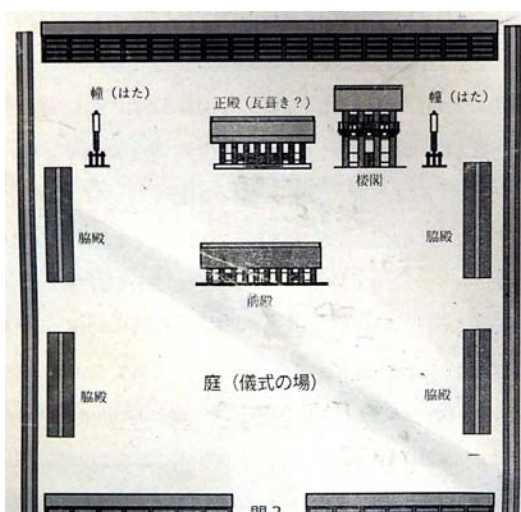
発掘調査の様子 (人が立っているところが正殿の柱跡)

右の図のように七世紀末から十世紀にかけて政治上の事務機関が石岡小学校のグラウンドから確認され、国の史跡に指定されています。

調査の歴史は古く、昭和四十五年に茨城大学の豊崎卓氏による調査が行われ、掘立柱建物跡の存在から国庁(役人が勤務する建物)と判断される画期的な調査でした。

その後、平成十一年の調査では、この時も掘立柱建物跡と、それに加え、校舎北側から国衙(現在の県庁が存在する敷地範囲で国衙の衙は役所という意味があります)を区画する東西方向の溝が確認されるなど大きな成果がありました。

さらに、平成十三年から十八年の六年間にわたり、石岡小学校のグラウンド部分の調査が行われ、成果が認められ平成二十二年には小学校敷地内の大半が国の史跡に指定されました。現在、遺跡は埋め戻され保存されています。



八世紀中葉国庁のイメージ

以上の発掘調査で、右図のように石岡小学校の敷地内には古代からの様々な建物の跡が検出されました。

正殿(先の図、発掘調査されていた椰子の木の前)や

脇殿は国司(中央政府から派遣されてきた役人)が実際に政務を行った建物、前殿と正殿は国庁内で行われる様々な儀式の時に国司が立つ場所、楼閣は国庁を立派に見せる意味があり、権威の象徴と言えます。また左右にある幢(はた)は、儀式に使う幢竿支柱(どうかんしちゅう)といつてこれも検出されている。その他、庭は儀式の場で、前殿に国司が立ち、庭に郡司層が並び、行われる儀式は上下関係を確認する重要な行事でした。

さらに、正殿と脇殿を囲む柵列の範囲は一辺が一町(一〇〇m)四方は、一般的な役所としては大規模であることから国庁であると判断ができる。

あらためて七世紀末からの建物の変遷を見ると七世紀末は一棟のみ。

八世紀初頭には半町(五〇m)四方東向きの配置。八世紀前葉になると、南向き一町四方の配置に。そして八世紀中葉になると、一部に瓦葺化が始まったとされ、また二面の廂をもつ曹司(国庁に伴う政務機関)が国庁の西側に出現する。

九世紀前葉になると瓦が葺かれている建物や板塀が築地塀(土を盛り上げて固め瓦を載せた)となり、より立派な塀で国庁の敷地を囲っていた。また国庁の西側に出現した曹司は饗宴施設と考える説もあり、総じて国庁全体が荘厳になった時期と言えるでしょう。

九世紀中葉から後半になると国庁の規模が縮小される時期になり、十世紀には主要な建物が消滅し、正殿のみが残る時期にはなります。

以上建物について紹介してきましたが、こうした国庁には中央政府から赴任してきた「国司」

と言う役人が政務をとっていました。主な役職は守(かみ)・介(すけ)・掾(じょう)・目(さかん) という四等官でした。大國であった常陸国はさらに掾と目が二つにわかれ大掾(だいじょう)・小掾(しょうさかん)、大目(だいさかん)・小目(しょうさかん)となります。これに加え史生(ししょう)・目の下に属した職員が中央から派遣されてきました。また雑色人(ぞうしきにん)といった実務を行う役人が地元から採用された。こうして規模の大きい常陸国では五〇〇人以上の役人が務めていたと言う。

古代奈良・平安時代は国府としての繁栄、鎌倉室町時代、武士の戦いの時代は府中城が置かれ、徳川時代には府中松平藩として栄えた重要なこの地、の一部(元石岡市民会館の跡)空地となつているこの地にこそ、石岡の深い歴史をお伝えする博物館の建設を切望します。不要とされていた陣屋門もほぼ元の位置に戻され、勇姿を誇っています。どうかこの陣屋門と響き合う建物の建設を切に切に望みます。

私事ですがふるさと歴史館にて時々受付当番担当させて頂いております皆様のご来館お待ちしております。

○この地の繁栄望みつつ佇む陣屋門 智恵子



我が人生の回想 18 木下明男

2000年代からギター館勤務へ・・・

10年間に渡り、ギター館を支え続けその存在に社会に認めさせたH氏。そのH氏から受け継いで、経営の責任を任せられ、本部労音から言われたのは、経営的自立と後継者の育成でした。専従としてギター館努めの課題は、独立採算の運営を構築することです。それまで、土日のみの会館とギター演奏を中心とした、年数回のコンサート開催をしていました。その運営は、宇都宮から毎週通つていたS氏やギタリストのI氏を中心とした、10数人のギター愛好者グループ。

関西のギター製作家のM氏やKギタリストを中心とし、つくば市を中心に活動していたグループも、定期的にギター館を訪問していました。特にギター製作のMさんは、情熱家で大変にギター館を愛し、陰に日向になって大きく力を貸してくれました。私自身の相談や、ギター界に大きな影響力を発揮してくれ、日本を代表するギタリストやギター関係者と繋げてくれました。まだまだこれからと言うときに早逝してしまい残念な事でした。偲ぶ会には多くのギター関係者が全国から茨城迄集まってくれました。

本部(松戸労音)からの要望もあり、ギター館を中心として茨城県内に労音例会を普及していく。取手市民会館、竜ヶ崎市民会館、牛久生涯学習センター、土浦市民会館、水戸の県民ホール等の県内主要ホールを使用してコンサートを開催し、労音普及と健全財政の確立を果たしました。コンサートは、寺内タケシとブルージーンズ、ザ・ベン

チャーズ、サーカス、ロス・カルカス、因幡晃々を主宰し労音と共にギター館の名を広めていきました。財政的には、赤字にはならない程度で大きな成果を上げることはありませんでした。しかし、地元出身(土浦)である寺内タケシは茨城県内での影響力は高く、コンサートの取り組みの中で後援会幹部との交流が深まりました。

特に後援会事務局長であった朝倉氏との出会いは、大変貴重で隣町(美野里町)でした。福祉に関する住民活動を進めていた中心的な人でした。朝倉氏を通じて、色々な方と出会いが生まれ交流が深まりました。労音の中から生まれた、出前落語家「東屋夢助」はギター館を毎年訪れ、地域の施設や集会所で小さな落語会を多く開催してギター館を広める役割を果たしてくれました。その際、大きく力を貸してくれたのが朝倉氏で、その輪はさらに広がりを作ってくれました。ギター館の存在は、ギターを広めることに拘らず、地域の文化活動の拠点の一つとして広がりを持ち始めました。



地域に眠る埋もれた歴史(95) 木村 進

【まほらの里】(3)

ブログ(まほらにふく風に乗って)の(2011年1月のブログから)いくつか興味深いと思われるものを何回かに分けて抜粋して取り上げています。今回は「貉(ムジナ)」です。

貉の話

(1) 清凉寺の貉

さて、人をだますという動物「むじな」の話を少ししてみたいと思います。

貉(むじな)を辞書で調べると主に「アナグマ」のことを言うとなっています。

また「狸(タヌキ)」「ハクビシン」などを区別なく呼んだ総称だともいわれます。

日本各地に「貉」の名前のついた地名が残されており、石岡にも映画撮影などにも使われた長楽寺のある「貉内」という地名がありました。しかし、今ではこの名前は少し範囲を広げて「龍明」に変わっています。

地名を調べてみると面白いことに、貉のつく地名が東日本から北日本それに北海道などしかなく、関西以西にはほとんどないようです。

どうらや「貉」とは東日本で古来から狸やアナグマ、キツネなどを指す言葉として使われてきたようです。

そこに中国から「狸(タヌキ)」という言葉が伝わり西日本では全て狸と呼ばれてきたが、東日本では両方が同じように使われてきたようです。

しかし、今では「貉(むじな)」は人を化かす動物と言う昔話の世界でのみ使われているといえますね。

さて、この貉が人をだました話しを一つ紹介します。

それは「清凉寺の貉」として伝わっています。

清凉寺には、昔、境内の大竹藪の中にある池の側の穴に、一匹の古貉が棲んでいました。

そして夜になると近くの大杉に登って、お月様に化けたり、人に砂をかけたりのいたずらをしていました。

また、寺の南の長屋に「鴉(からす)の長さん」と呼ばれる鴉の鳴きまねが上手な男が住んでいました。

ある晩に、この長さんの雨戸をトントンと叩く音がするので、長さんが雨戸を開けてみても誰もいません。

そんなことが幾晩も続きました。

あまりにしつこいし、どうもいたずら好きな寺に棲む古貉だと思い無視して黙っていることにしました。

それからしばらくすると、長さんの返事がないので、面白くなくなったのかやっこなくなるとみえ音がしなくなりました。

それから何日かたつたある日に、近所の若者や子供たちが貉退治をしようと寺の近くに集まりました。

そして、子供たちは貉を穴からいぶしだしてやろうと、とうがらしに火をつけ煙を穴の中に流し込んで、貉が出てくるのを待ち構えています。

すると寺の本堂の方から大きな声で「こらー、お前たち。本堂が煙で一杯じゃ。涙とくさみがでてかなわん」こわい顔をした方丈さん(住職)が現れました。

子供たちは驚いて皆そこから逃げ出したが、それ以来貉は姿を現さなくなったということです。

どうもその時の方丈さんこそ、貉が最後に化けた姿であったのではないかと言ひ伝えられているそうです。

何処にでもありそうな話ですね。

でも、何故鴉(カラス)の鳴き真似がうまい長さんが出てくるのでしょうか。不思議ですね。

ところで、この清凉寺は中町通りの金刀比羅神社の隣りにあります。

元々は1330年頃に尼寺ヶ原の地にあったのを1480年頃に現在の地に移したもので、府中城落城(1590年)時に焼失しました。



しかしその後この地を支配した「佐竹氏」により再建され、佐竹氏の菩提寺となりました。

しかし、10年位後には佐竹氏は家康によって秋田に移封となり、この清凉寺も、ともに秋田の湯沢に移されましたが、ここも残ったものようです。

石岡には珍しく「佐竹家」の紋「月丸扇」が寺についています。

これを日の丸扇という人も多くいますが、当日の丸は天皇家を指すので、月丸と称していたよ

うです。



(2) 小川街道の狐

さて、猪(むじな)が人を化かす話と似た話で、キツネが化かす話も各地に多い。

ここ石岡にも「美人に化けた新地の狐」という話が伝わっている。

ここで紹介したくなかったのは、今でこそ小川街道(355号線)は通りの両側に飲食店などが立ち並び賑やかな通りとなっているが、そのむかしの趣を伝える昔話として面白いと思ったからである。

むかし、小川街道は「原道」といって道の両側は松林でおおわれ、人通りも少ない寂しいところであった。

県道沿いの兵崎地区の谷津(石岡中学校の少し先の反対側)に新池という池があった。

ここに古い狐が棲んでいて、よく通行人を化かすと言われていた。

明治初年のある夜、志筑(しづく)に住んでいたある男が、小川への用事をすませたの帰りにこの池の付近にさしかかった。

すると、行く手に美しい一人の婦人があらわれ、「旦那さま、どちらへお越しですか」とやさしく

声をかけてきたので、思わず「はい、志筑へ帰るところです」とこたえてしまった。

するとその婦人は「私も志筑へまいるところです。どうか一緒にお連れ下さい」と頼み込んできた。

少し疑わしい気もしたが、こんな美しい婦人と一緒なら楽しい道中になると考えた男は、承知して仲良く二人で府中の町々を通り、宮下を過ぎたあたりまでやってきた。

するとその婦人は「ごめんなさい」と言いつて、燈の見える一軒の家の中に入ってしまった。

男は不審に思い垣根の外に立って中の様子を見ががっていた。

しばらくすると、家人と挨拶する婦人の姿が障子に映り、続けてお土産の万頭(まんじゅう)の包みを開く姿が映った。そこには狐のしつぽが。

男はこれは狐の化身と思い、「そりや、いけねえ!それは馬糞だよ」と叫んで、家の中に飛び込んだ。

ところがそこは家ではなく池であったのだ。

男はおぼれて死んでしまったのだろう。

このようにこの新池は、幾人も尊い人命を奪ったので、「死池」とも呼ばれるようになったところである

このように小川街道も、明治初めの頃までは、石岡の地から少し離れただけであったが、寂しい通りだったようです。

しかし、この道は玉造・行方から鹿島や銚田方面の海岸と結ぶ昔からの街道なのです。

鹿島から大洗の海岸で採れた塩を都「府中」へ

運んだ「潮(塩)の道」でもあり、親鸞聖人も何回も通った道でもあります。

歴史の詰まった道ですが、鹿島鉄道が廃止されるとその昔のことも振り返らなくなってしまうとしたらとても寂しいことでもあり、その地には文化が育たないともいえるでしょう。

(3) ゴボゴボ池の貉

ここ石岡に残る貉の人を化かす話をもうひとつ伝えておきたいと思います。

それは今の風土記の丘公園の古代ハス(大賀ハス)が生い茂る「金山池」に伝わる話です。

むかし、龍神山の中腹に貉の穴があり、ここに棲んでいた古貉はときおり人が道を通ると、東の空に月が上りかけているのに、月に化けて、その反対側の空に月を出してしまい、通行人に石を投げられては、あわてて木からとびおり、いそいで藪に逃げ込んだりしていたといひます。そのため「間抜けな古貉」といわれていました。

ある日の夕暮れどき、龍神山の麓にある金山池の辺りを通った男が、ふと池の方をみると、池の上にはさし出た松のところに丸い、うす赤味をしたお月さまが出ていました。

男は、これはまた間抜け貉だと思い、松の木の幹をゆり動かしたところ、貉は松幹にしがみついているようです。

そこで男は、さらに幹をゆすりながら大声で「馬鹿貉!池におっこちろ」と叫びました。

その大声におどろいたのか、古貉は松の幹から手足を外してしまい、そのままドボンと水におちてしまいました。

そして、ゴボゴボもがきながらとうとう溺死してしまつたといひます。

それ以来、池の水はいつも、ゴボゴボと鳴っているといひます。

このため、この池のことをゴボゴボ池と呼ぶようになったのだといひます。

……

どうです。これも他愛もない話ですよ。ここでも貉が人に化けるのではなく「月」に化けていますね。



この貉が棲んでいたという龍神山は年々削られて小さくなつていっています。

昔は市の所有でしたが採石業者に売つてしまつたようです。

当時は今とは逆で小学生の数が多く、小学校を増設や新設する必要がありました。市は新しい小学校を市内に建てるために使つたともいわれています。でも失つたものはとてもとても大きいですね。

(4) 小泉八雲の貉

貉の話としては小泉八雲（ラフカディオハ

ン）の「怪談」に出てくる「のつぺらぼう」の顔の話が有名ですね。

このタイトルがムジナです。なぜこのタイトルになつたのでしょうか。

小泉八雲は日本に帰化し、耳なし法一などの話をもっともよく知られていますので、てっきりこの話も出雲の方の話かと思つていました。

しかし、出雲の国造の家系を持つ女性と結婚して、出雲に住んでいた期間は比較的短いようです。

日本に暮らした多くは東京にいたのです。このムジナの話も江戸末期から明治初期の東京の赤坂にある紀之國坂での話です。

今の皇居のお濠とホテルニューオータニの近くです。

……

ある商人がある晩おそく紀國坂を急いで登つて行くと、ただひとり濠（ほり）の縁（ふち）に踞（かが）んで、ひどく泣いている女を見た。身を投げるのではないかと心配して、商人は足をとどめ、お女中」と声をかけた。『お女中、そんなにお泣きなさるな……何が困りなのか、私に仰しやい。その上でお助けをする道があれば、喜んでお助けしましょう』しかし女は泣き続けていた。『どうぞ、どうぞ、私の言葉を聴いて下さい！……ここは夜若い御婦人などの居るべき場所ではありません！……』

徐ろに女は起ち上つたが、商人には背中を向けていた。そしてその袖のうしろで呻き咽びつづけていた。

商人はその手を軽く女の肩の上に置いて説き立てた——『お女中！——お女中！——お女中！私の言葉をお聴きなさい。……するとそのお女中

なるものは向きかえつた。そしてその袖を下に落とし、手で自分の顔を撫でた——見ると目も鼻も口もない——きゃつと声をあげて商人は逃げ出した。

一目散に紀國坂を駆け登つた。ただひた走りに走りつづけた挙句、ようよう遙か遠くに、螢火の光っているように見える提灯を見つけて、その方に向つて行つた。

それは道側（みちばた）に屋台を下していた蕎麦屋の提灯に過ぎない事が解つた。商人は蕎麦売りの足下に身を投げ倒して声をあげた『ああ！——ああ——ああ……』

『これ！ これ！』と蕎麦屋はあらあらしく叫んだ『これ、どうしたんだ？ 誰れかにやられたのか？』

『盗賊（どろぼう）にか？』

『盗賊（どろぼう）ではない——盗賊（どろぼう）ではない』とおじけた男は喘ぎながら云つた『私は見たのだ……女を見たのだ——濠の縁（ふち）で——その女が私に見せたのだ……ああ！何を見せたつて、そりや云えない』……

『へえ！ その見せたものはこんなものだったか？』と蕎麦屋は自分の顔を撫でながら云つた——それと共に、蕎麦売りの顔は卵のようになった……そして同時に灯火は消えてしまつた。

……

この話は江戸に伝わっている話をきくと聞いて想像をふくらまして書いたものなのでしょう。小泉八雲は今から30年ほど前と書いているので、江戸の後期の話ですね。

皇居は江戸城があつた場所ですが、結構寂しい坂も多かつたのでしよう。

またこの中で「紀國坂」を何故このようにい

のかは知らないとも書いています。
興味があったことがうかがわれます。

でもこれで「ムジナ」のつべらぼう」のように思われてしまったのですが、この辺りでそのような話は聞いたことがありません。

さて、貉とは何を指すのでしょうか。狸やアライグマだけでなく、もっと似たようなもので人を化かすといわれるようなものをまとめて言うように思います。

ネットを調べていたら面白いものがありました。「たぬき・むじな事件」というものがあつたようです。

大正13年(1924年)に「たぬき」の狩猟が禁止されました。しかし、施行された日の前に「むじな」を捕獲し、施行後にこれを銃で撃つた事件が狩猟法違反だとして裁判になったのです。判決は「たぬき・むじな」は動物学的に同一だが、多くの地域で「たぬきとむじなは別物」と考えられてきた。また、穴に閉じ込めて捕獲したのが刑法の施行前であつたので無罪……

「たぬき・むじな」は動物学的に同一とは、なんと分らない判決ですが……興味があればご自身でお調べください。



怒

伊東弓子

私の心の中にある感情の中で一番多いのは、「怒」かと思うことが多い。おこりっぽい人間なのか。いや良くしよう。向上しようという気持からだろうか、不満の気持からだろうか、などと考えるが、はつきりはしない。

私の怒りの一つを聞いてください。

桜の並木や名所が話題になる。冬の寒さや辛さから解放されて、明るい陽ざしに包まれる喜びからだろうか、“美しい、きれいな、何て素敵”など、追いかけてながらもてはやす。

夏がくるとどうだろう。小さい赤い実が転がっていても人間は踏んでいても、あの日感動した花の実だとは思ってもよらないだろう。桜の話題は全くなくなる。蟻やカマキリがでこぼこの木肌を登ったり下りたりしている。蟬が十年以上もかかって地中での生活から、這い上がり脱皮し大きく羽根を広げた喜びの感動も精一杯の声にも“うるさいね”の一言。仲間との大合唱になる頃には、良い相手も出来ての幸せは一瞬、赤茶けた落葉の中に仰向けに、うつ伏せに、半分体がちぎれていても誰も哀れとも思わず急ぎ足で過ぎていくだけ。

台風の時節、街路樹が折れた。人を怪我させたとニュースになる。まるで桜の木が悪いかのようになり大騒ぎになる。その揚句枝を切られたり、幹から倒されていく。

冷たい木枯らしの電線をうならせる頃、こげ茶色や黒くなった葉を巻き上げていく。踊らせて過ぎていく。こうなると厄介者扱いだ。雨に濡れて排水路を埋めていく。人間は掃除をしようとしなない。詰まってしまうと大仕事になるがよくだけ

だ。

とうとう冬が来て、丸裸になった木は寒さに耐えながらも次の生命をもやすため準備をしていくのだろう。その姿を見るたびに腹が立つ。春の一寸した瞬間だけをもてはやしが、この木の苦しみを人間はわかっていない。

「美しい並木をつくろう」「名所にしよう」「木陰をつくろう」という目標のみで、あちこちできていった。だが、道路・歩道ともコンクリートで固められ、幹の周りだけ一寸小さな周りだけ土があるだけ。太陽の光は大地に届かず、コンクリートで跳ね返り、木の枝に強い熱気をはね返すだけ。雨水も細い根に届くことは恐らく時間のかかることだろう。あの幹の周りにあいた小さな所からしか流れていないだろうから、木が延びていく大地にある木々より、もっともつと苦しい努力をしなければならぬだろう。根は柔らかい地中の中で伸びようと、道を求めて進んでいくことだろう。それはそれは大変なことだろう。乏しい水、恵まれないやすい熱気、充分でない栄養を求めて足を伸ばしていくと、硬い硬いコンクリートにぶつかる。大きくなるうとする木の思いは、それも耐えなければならぬ。耐えて耐えて長い年月をかけて重いコンクリートを持ち上げる大きさ、太さになつて行く。歩道のコンクリートは、こうしてあちこちに頑張って生きている姿を見せる。それでも人間どもは何も感じないのか。予算も無いのか。知らんぷりしている。仕方がない。俺は頑張るぞ」と、頑張っている木もある。力尽きてじわじわと首を絞め、生命を落としていく木々もある。人間に支障が来ると、大騒ぎ、ニュースに取り上げられるだけ。

今年の冬は誰が気が付いてくれるかな。可哀相な木があるよ。コンクリートをはがしてやろう。と・・・

近い所では南台の団地内、そこに住んでいる人が気が付かないと。又六号から自動車学校の方へ行く通りもひどい。車の利用者は関係ないというところだろう。

それと木の葉が散るとなかなか腐らない葉、大きい葉ということで、紅葉の美しさも見えない中に、木陰も必要でなくなった時期に惜しげもなく枝を切られてしまう所も目につく。石岡の工業団地内の銀杏、美野里のけやき通りのけやきなど、もともと場所によってさまざまなのがあるのだろう。夏の強い日射を帽子や日傘で対処する等、一歩二歩と人間自身が譲り合う気持ちになれないものかと、嘆くだけの私で情けない。

植えるなら花はどうか。いや季節ごとに手入れをするのは大変、なら自然の草を生やしておくのもいいでしょう。草刈り、草取りもなく自然の姿をそのままみんなで感じるのもいいだろうと思うこの頃。

あれは若い頃聞いた話だった。新しい時代が来たと喜んでいる反面、地主と小作という関係が根強く残っている頃、貧しい中でも大切なものをしつかり持っていた老人の話だった。

家の者みんな、朝早く地主さまのお屋敷へ向かう。男、女、大人、子供に合った仕事が決められていて仕事をしていたという。「自慢じゃねえが、俺は正直者の人間だったと自負している。小作のなかには、こずるい野郎もいて帰りがわに干してある物を、懐に入れたり、袂の中に詰めたりして

いる。素知らぬふりを帰って袋をよく見たという。爺さんは帰り際にいただく物がとても嬉しかったという。みんな分けて地蔵堂の所で食べたという。

その頃は爺さんと呼ばれていても、まだまだ仕事は負けなかったという。屋敷の奥の方の草取りや木々の手入れが主だったという。大きな立派な木が四、五本立っていたが、木々の周り全体がレンガで敷き詰められていたという。しばらくの間はそういうものかと思っていたという。ここだけは草も生えないし、逆に葉が出来るという思いだったそう。木々は季節に花を咲かせ、芽を吹き、実をならし、葉を落として一年が過ぎて行った。芽吹きの際は自分も生き生きする思いだった。毎年毎年同じように繰り返されている中に自分がいいる。木はどんどん大きくなっていく。幹の所が狭くなって陽の光や雨水が木の根まで届いているのかと、はっとしたという。わしは年々年老いている。そこで胸が鳴り、はっと思ったら矢も楯もたまらず、この木の根に少しでも光をあてなくては、根に雨水を届けなくてはと考えた。仕事に行く日は必ず一枚でも二枚でもいい、こっそり実行したそう。その間にも二本の木は枯れてしまった。青葉を出すこともなく春の陽さしを受けて淋しい姿になっていった。他の三本は毎年元氣そうに芽を吹いているが、これも土の中ではどうしているのかわからない。そう思うと心は急ぎがちに作業をした。旦那様は気が付いておられるかなと心にはかかったが、私も力のある限り、この木三本を助けるために頑張ろうとあらためて歯を食いしばった。旦那様が亡くなられたのは、三本の木が若葉に包まれ、さわやかな日だった。線香をあげながら黙ってことを進めたことあやまった。広範囲に取り外

しても目につかなかったのか。人生の中でいくつ隠し事をしたか、これは一番大きな隠し事だと、ほくそ笑んでいた。その時、栗が落ちる音がしたと聞かせてくれた。

とてもいい話だと、あの時の私はとても気持ち良かった。今でもそう思っている。

結局は人間の都合で植えたり、切ったりしている。

“カーツ”と、なることが沢山ある。

“ムーツ”と、なることも多い。

自分にも“カツ”を入れて穏やかに生きていこう。

諏訪神社

小林幸枝



能登半島を中心に発生した豪雨により、亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、ご貴族の皆様にご挨拶させていただきます。

また被害された皆さん、ご家族、関係者の方々にあらためて心よりお見舞い申し上げます。

まだまだ続く復旧復興と一緒に頑張りましょう。

「諏訪神社」

先日千葉県いすみ市で訪れた、何の変哲もない神社の境内に隠されるように据え付けられた巨大な物体がありました。



(八坂神社)

この諏訪神社の隣の八坂神社に近づくと何やら貼り紙がしてありました。

「防犯カメラ撮影中」と書いてありましたが、左手に何やら細かく書かれた文書が貼ってありました。

裏に回って、凄い！なんでこんなところに置かれているの？と思いました。

「諏訪神社内の天王様裏に揚げられたプロペラ」でした。(この天王様は(牛頭)天王社のこと、今の八坂神社です)



鉄のプロペラと思ってよく見たら、木目のように見えました。交互に重ねているのが分かります。一つの木から削り出したところまで大きいのは作れないから、小さい木片をうまく重ねて作ったということ。それで終戦から75年、これが離れそうな感じはありません。昔の技術者は凄い！！

木製のプロペラに金属を融合させる技術が凄い。ネジ穴は見当たらず、金属からいい感じのスポットが浮いて見えます。

説明板に書かれていた内容は

「ひとこと」

この天王様の裏に架けてあるプロペラは、屋敷下出身の故石井正雄氏(浦安町)があの大東亜戦争当時、諏訪神社に寄贈されたものであるというだけで、いつの時代に、なんの目的で造り、どんなルートで手に入れたのか、全く不明です。ただ「中島飛行機製造所」製であることだけは分かっています。

直径三・二メートル、四枚羽根で重さも五十キロはあろうかと思えます。これを高速で回転させ空を飛ばした日本人技術者の優秀さが偲べれます。更に驚いたことは、このプロペラの貼り合わせ技術で

す。これが現在の新建材「集成材」の原点なのでしょう。目的がなんであろうと、戦争は悲惨なものです。話題を提供するために未永く保存したいものです。プロペラ保存会」

連合艦隊司令長官であった山本五十六は、退役した木製プロペラに自ら揮毫による書を刻んで全国各地に送られたといわれて残されていますが、この「山本五十六のプロペラ」は木目が全くない美しいプロペラですが、このプロペラも味のあるプロペラだと思います。

モノは間違いなく昔の飛行機用、高い技術で作られたプロペラです。

海で眺めてばかりではなく、途中で足を止めてスポットを訪ねてみてはいかがでしょう？

諏訪神社

千葉県いすみ市小沢 2673

「銚田周辺の河岸」の企画展

ヤマナカタダオ

毎日新聞の茨城版(九月三日朝刊)に、企画展の案内記事が載っていました。先日の日曜日に、銚田市徳宿の生涯学習館「とくしゅくの杜」に行きました。銚田市は、東側が太平洋に、西側の一部が霞ヶ浦北浦に面し江戸時代から昭和初期ごろまで水運の要所として栄えました。この展示会を企画したボランティアの市民学芸員の浜田さん(82)によると、江戸時代中期の1770年代に

幕府が水戸藩領内（県央地域）などで収穫した作物を江戸に運ぶため、市内の北浦周辺などに、農作物を保管したり積み下ろしたりする倉庫と船着場を併設した「河岸（かし）」を4ヶ所整備。現在の潮来（いたこ）を抜け、利根川や江戸川を経由し、現在の東京・浅草周辺の蔵までを約10日で結んでいた。だが明治に入り、水戸―東京間が鉄路でつながると、銚田の水運需要は減少。昭和初期の1930年ころまでに河岸も姿を消したとされる。

以下、現地配布資料より転載します。

銚田河岸の成立

どうして、銚田に河岸ができたのであろうか？それは、御案内の内川廻りに原因があると考えられる。

当初、内川廻りの廻米運送は、那珂川より涸沼西側の海老沢を経て江戸に運搬するのであるが次の2コースがあった。

- ① 海老沢（陸送）→下吉影（小川町）〔陸送〕
→小川（高瀬船に積み替え）→利根川→江戸川→小名木川→江戸各所（隅田川近辺の深川、蔵前、両国、浅草、水戸藩下屋敷小梅邸、各所へ）

- ② 海老沢（陸送）→大和田（舳に積み替え）→串挽（高瀬船に積み替え）北浦→利根川→江戸川→小名木川→江戸各所へ。
- その後、涸沼東側、松川→造谷→子生→樺山→徳宿の陸送コース（別名、米付街道）が出来、徳宿河岸・駒木根河岸で船に積み替え、串挽河岸で高瀬船に積み替えた。

そんな中、銚田河岸の出現は、元禄元年（1688）

であるとされ、事実上の活動の場として、享保元年（1716）に徳宿から串挽の急場陸揚げ地として銚田河岸が出来た。

ここで、米俵400俵から600俵積みの大形高瀬船に積み替えが可能になり、七瀬川、巴川から、北浦、利根川経由で江戸に向かった。

安永3年（1774）、河岸問屋制が設けられ、問屋の数は8軒に定められたとの記録があり、奥州諸藩をはじめとする江戸廻米需要は、流通ルートの一つとして、銚田河岸を発足させた経緯がある。

銚田の川沿いには

- ① 荒野平左衛門河岸
- ② 堀米半右衛門河岸
- ③ 吉見清十郎河岸
- ④ 田山三郎兵衛河岸
- ⑤ 小島順之介河岸
- ⑥ 田山彦右衛門河岸
- ⑦ 田山藤右衛門河岸
- ⑧ 田山保儀河岸

が立ち並びその後、田山藤右衛門河岸は、旭町通り（現旭町公民館所在地）の渡辺久右衛門河岸になり、宮川橋付近の田山保儀河岸は新堀河岸に引き継がれた。旭町二丁目通りには渡辺久右衛門所有の額賀倉庫が立ち並び、船運関係の飲食店等にぎわった。

当時の運送料を一例としてあげると、旗本飯河領の安房村では、弘化2年（1845）2月28日に、榎植1620束を銚田河岸より運賃金一両銭346文で江戸に送り、10月18日には、銚田河岸より米20俵・糯米4俵・粟1俵・篠12束を江戸に送っている。

船賃は金3分である。安政5年（1858）12月15日には、薪600把を運賃一両2分4朱（現在の料金に換算すると約227、500円に相当する）で江戸に送っている。

このように、河岸は領主の年貢米や生活物資輸送をはじめ、商人荷物の輸送を目的に設置されたのである。

その頃から、河岸全盛期が始まり、河岸付近を中心とした旧街に倉庫、問屋、旅館、飲食店、商店、住宅が増え、花街文化が形成された。さらに人々が集まり時代が進むと、国や県の支所、金融機関、学校等ができ、明治、大正、昭和を通して、街を形成していった。そして銚田が、鹿行の中心地になったのは、この頃であった。

商業中心の水運航路の時代が変わり、蒸気船が銚田川岸に発着するようになったのは、明治16年（1883）4月からであった。

明治政府の布告により貨物運送を独占した陸運専門の会社は、明治8年（1875）2月、内国通運会社と改称し（後の「丸通」。現在の日本通運（株））、東京両国を起点として江戸川、利根川近辺の川汽船営業を開始した。佐原→銚田間の開設当初は、東北、常磐地方にはまだ鉄道がなかったため、奥州地方、那珂川上流、栃木県方面の旅客貨物もこの航路を利用する者が多く（那珂湊経由）通運丸が人気で、関東地方における運送機関の花形であった。

蒸気船は当初の頃、旧役場前（現在の鬼沢クリニク）まで入船したが、日清戦争前後は銚田→串挽間の県道開設により、横町下に架橋され廻船も不便になり、旭町宮川橋付近まで下った。

大正期には、旧七瀬川下流部（街中に流入する辺り）の水深が次第に浅くなり、遂には旧巴川に架けてあった大橋（旭町大津飼料店前）付近が発着所となった。

さらに昭和初期には、安塚河岸まで後退した。
銚田河岸も、昭和4年(1929)に、鹿島
参宮鉄道が石岡↑銚田間に開通すると終焉を
迎えた。(終)

※下吉影の住所は現在、小美玉市に属するが、
河岸跡は巴川東にあり、巴川自体は銚田領域に
なっている。

〔出典〕 『図説「ほこたの歴史」』

『銚田物語』

『銚田町史通史編(上)』

『図説鹿行の歴史』

『鹿行の今昔』

【編集部よりお詫び】

今回の記事に予定しておりました一部の会員の方
の記事が都合により掲載できませんでした。お詫
び申し上げます。次回掲載を予定しています。

【風の談話室】

《読者投稿》①

おやと暮らし(78)

おと女

今年も暑い暑い季節がやって来た。何年か前に、
1株だけ植えた半夏生・・・今年はとてつもなく
増え、その1画だけでも涼しげだった。これから
始まる暑い暑い季節、体に気をつけ、乗りきらね
ば!!

【7月】

・暑くて体が溶けそうです。先日近所の方から、
メダカと金魚をたくさん頂いた。既に我が家の駐
車場は、淡水魚水族館???タナゴや金魚・メダ

カで占領されている。夫は水槽のエアポンプの開
発やボランティアなどで暇無し・・・庭や屋敷回
りは膝までの草に覆われている。でもまあいいか
どこの家も、似たり寄つたりの草だらけだから?

・昨日は茹だるような暑さ。そんな中、園部公民
館主催の歴史散策に参加した。バスの中は快適で
北茨城方面に向かい出発、小名浜で見学や海の幸
の昼食。お腹を満たした後は岡倉天心五浦美術館、
少し移動して岡倉天心の遺跡を巡り散策。この辺
りの海岸は素晴らしい。この地に住まいを移した
天心は最後の10年間拠点にしたという。海岸の岩
の上に立つ六角堂は13年前の地震で流されたが、
天心の思い大波を見る東家は再建されていた。最
後は野口雨情記念館。雨情の作品や遺品の数々が
展示・・・有意義な1日だった。

・耕作放棄地のように雑草に覆われた我が家の屋
敷回りに耐えられず、滴り落ちる汗にも負けず、
草刈り開始するも2時間程でギブアップ。昼は自
分たちへのご褒美に高浜のいづみ荘にうなぎを食
べに、これでいくらか快復したかな。いづみ荘に
は前から気になっている場所がある。建物の裏手
に何年も放置されていた物置小屋があった。そこ
を有志の方たちが整理して、古本屋にして、自分達
の居場所にしたようだ。壁一面にきれいに並んだ
本棚、なんと、この本箱はリング箱だそうだ。レ
コードなども聴ける。毎月、15日には歌声喫茶も
やるのか?まだ走り出したばかりだが、いろいろ
楽しいことが起こりそうな感じがする。

・堆肥の中から芽を出したカボチャの花が咲いた。
暑さでほうって置いたら勢いが止まらない。畑一
面に広がったツル。立派なカボチャがごろごろし
ている。昨日収穫して天婦羅にして食べたが、少

し早かったかも。

・5年程前に竹の師匠から頂いた10センチ程だ
った苗木。今は3メートルにも育った。ぼぼの木
“今年の春初めて白い花を咲かせ、3個程実をつ
けている。バナナとマンゴーを合わせたような濃
厚な味だが食べ頃は数日しかなくお店ではみたこ
とがない。来年が楽しみだなあ。”

【8月】

・秋には赤い実をつけるカラスウリ。散歩中にカ
ラスウリの蔓が藪一面に張っている所を見つけた。
花は暗くならないと咲かない。今夜はどうしても、
花をみようよと、懐中電灯を照らしながら9時頃行
って見た。見事にレース状の花が一面に咲いてい
た。藪ならではの夜の美しさだった。

・友人夫婦が5年ぶりにやって来た。以前ポラン
ティアで大変お世話になった二人です。友は久し
ぶりに八郷巡り・・・ゆりの郷で温泉に浸かり、
大場ブドウ園でブドウを買い、園主から茅葺き屋
根を説明してもらい、また、たくさん試食させて
頂いた。夜は我が家でワインを飲みながら、5年
分のとりとめもない話をして、2日目ブルーベリ
ー摘みやら、駒村さんの水車小屋を見学したりし
て、暑さも吹き飛ばす程、楽しみました。今度い
つ会えるやら・・・

・まだまだ暑い日々が続いているのに、夜間は秋
の虫たちの鳴き声で、賑やかになってきた。今日
は夫が久しぶりに畑の草刈り、畑一面に張ってい
るカボチャのツル。勢いがすごい。草刈りしながら
カボチャを収穫していた。木に登っているものや
ら4キロ半もあるもの、平均すると3キロ位か
な。何の手入れもせず堆肥からのもの。いろんな

人に持つて行つてもらい・・・カボチャ外交。

【9月】

・二泊三日で姪夫婦がやつて来た。翌日生憎の雨だったが大子方面に出掛ける。途中、どしゃ降り
の雨に会ったが、袋田の滝につく頃には雨も止み、
迫力のある滝を見ることができた、もう、感激の
一言です。

滝見学の後地元の方に教えてもらった、ひなびた
温泉宿で温泉に入り、食事をした。石づくりの内
湯や露天ぶろにまた、食事も美味しく満足・・・。
帰る頃は雨も止み道の駅などめぐりながら帰って
来た。今日はブドウ屋さんや柿屋さんを訪ね、沢
山お土産を持つて帰って行つた。

・暑さが戻つて来た・・・今日はイチゴやの手伝
いに出かけた。苗床に苗を植える作業、ほどよく
育つた苗を一定の間隔に植えて行く。予定のなか
つた夫も同行。5〜6本植えると腰が痛くなり
腰を伸ばしながらの作業。暫くすると栗農家さん
2人合流。6人でやるも1ハウスが精一杯。この
大変さを思うと一粒たりとも無駄に出来ない。美
味しいイチゴが実りますように・・・。

・素敵な午後のひととき・・・フラワーパーク
近くにあるカフェレストラン「狭霧」での、「中本
マリジャズライブ」大きな窓から見えるつくば連
峰の遠景、レストラン内の大きな鏡に外の緑が写
し出されている。良い雰囲気で開催されたジャズ
ライブでした。満員のファンと、ベース、ギター、
中本マリの素敵な歌声、何とも贅沢なライブを楽
しみました。時に、胸に、グッと迫るものなど感
じながら、私より少しお姉さんのマリさんにエー
ルをおくりました。

【風の談話室】 《読者投稿》②

続・こんな話を聞いた

(補) パリについての一考察

池崎 晴

在る方が、突然こんな話を始めた、と思つて頂
きたい。

「私はパリに行きたい」

「五輪ですか？ 旅行ですか？」

と応えながら、日本人の海外旅行離れが進んで
いると云う話題を思い出した。海外へ行くエネ
ルギーがなくなつたと。反して高給を求めて海外流
出が続く労働力。

「旅行ではパリの事は判らないから暮らしたい。

二ヶ月か三ヶ月か・・・」

と続ける。

「何故にパリ？」

と問うと

「昔はニューヨークに行きたかつた。ニューヨ
ークには色々なものが集まつていてと思えたから」

えつパリの話ではなくニューヨークの話？と
思いながら話を促す事に。

「米国(アメリカ)には行った事あるんですか？」

「米国には行った事はあるんだけどニューヨ
ークには行ってないんだよ。でも米国に行つて
何となく判つてしまつてニューヨークに興味は
なくなつた」

「そんなに長く米国に行つてたんですか？」

「旅行ですよ」

「えっ!? 旅行じゃ判らないからパリで暮ら

したいと言つたのに、ニューヨークは旅行でさえ
行つてないのに判つた氣になつちやたの？

彼と話していると面白い。自覚はないんだろう
が、ありありと矛盾を孕んだ発言を平気でするし、
大風呂敷の広げる。

人はそもそも矛盾の塊で、日常の会話もそんな
ものだ。そんな会話を舞台に上げたのが、つかこ
うへいと云う劇作家・演出家だ。稽古場で役者に
つか自身が台詞を発して芝居を作つて行く。「口立
て」と云う手法が、その場の役者の気分・つかの
気分で紡がれて行く。故に登場人物はその場の気
分を現して行く。そのライブ感を大切にす為、
後に帳尻合せをしない。故に活々とした人物が激
流の様な物語を生んで行く。そのつかの作劇を知
らないと細かい帳尻合せをした演出をしてしまう。
そんな舞台は少くない。

彼を見ていると、つか芝居の登場人物を彷彿と
させる・・・とは言い過ぎか(笑)

閑話休題

彼の力説は続く。

日本の知識人・文化人・絵描き・・・綺麗、星
の如く人々が何故パリに行つたのか？ それを感
じる為には最低でも月単位で暮らさなければ無理
だ。

恐らくはパリ五輪で露出が増えたのが興味が強
くなつた原因だろう。彼にはそう云う流れに弱い
ところがある。大谷選手の米国リーグでの活躍の
話ばかりの時があつた。私は大谷選手ドジャーズ
移籍時のダークゾーン契約以後全く興味がなくな
つたと言つたら私には話さなくなつた。サッカー

ワールドカップの時には日本代表の話ばかりだがサッカーの知識なく、前大統領暗殺未遂事件の時は狙撃銃の事もシークレットサービスの事も全く知らずに話し出す。世の中の話題に見事に踊らされるが、それが若さの秘訣かもしれない。その喰い散らかす様な興味がパリに向いている。

「パリに行きたいんだよ。パリで暮らしたいんだよ。パリを感じたいんだよ」

高齢者の仲間でありながら、この興味力！

そのパリ五輪開会式で、彼は苦言を吐く。

「下品でテレビを消した」

話を聞くと、ムーランジュールのショーの事を言っているらしい。彼はリアルタイムで観ていた様だが、私は録画してゆっくりと観た。五輪開会式だから抑えた演出だったのだろう。私としては期待外れだった。あまりに地味だった。ムーランジュール、大人社交場(キャバレー)、エロスの世界だ。地味な演出の上、自前撮影で中継に挿入(インサート)されたものだと後に報道された。

そんなシーンを彼は一刀両断する。

「下品」

それに応えて私は

「あれを常々と披露出来るのがパリの凄さですよ」

彼は抗い続けるのだが・・・。彼がその手を全て否定している訳ではなくストリップ文化の素晴らしさなんかも理解はしている様なので、何故「下品」と一刀両断し、テレビのスイッチを消す程怒るのか？

今回のパリ五輪ではLBGTQへの理解や差別否定も打ち出していた。橋の上でのファッションショー。LBGTQの人々が集う宴。そのシ

ーンをキリスト教一部の人々が、最後の晩餐への冒涇だと怒り出した。バチカンがその騒ぎを抑えるかと思いきや開会式のシーン批判発言をした。その冒涇だと云う発言が屁理屈だとは一目瞭然だが、バチカンまでもが批判にまわった事に愕然とした。宗教の不寛容甚だし。

「右の頬を打たれたら左頬を差し出せ」とは新約聖書マタイ伝にイエス・キリスト曰く。

パリ五輪開会式演出スタッフはLBGTQを開会式に盛り込もうとした時点で、かなりの反発を受けている。それを跳ね除けLBGTQ差別

に否をうたいあげた。お見事だ。

彼には「下品だ」などと目をそむけずに最後まで

で観て感じて欲しかった。

かつて、アルジェリア独立戦争の時、パリでは警察を主体として大虐殺が行われた。遺体だけでなく生きたままでセーヌ川に流された。その多くは未だに不明のまま。開高健は当時パリにいて「パリは外国に文化を売りつけるが国内では野蛮な行為をしている」と云う意味の事を書き遺している。

さてさて、彼はパリで素晴らしい何かを感じる

為に何か行動するか？ この文章が世に出た時は

次の興味に歩を進めているか？

『後日談というか今日のオチ』

「パリで暮らすと云うならそのまま客死ってか

っこよくないですか？」

「客死なんて言葉、久々に聞いたよ」

と彼。

「かっこよくないですか？」

彼は破顔する。

「それは良い!! 客死なんて言ってくれるのは貴方だけだよ。他にはいない。是非書いてよ!!」
と云う訳で、こんな雑文(駄文)を書く事となりました(笑)



記憶と記録・・・記録を残す大切さ 木村 進

私がここ石岡に引っ越ししてきて18年が過ぎました。石岡の街に昔から住んでおられる人から見ればまだまだの新参者ですが、「10年一昔」と考えればもうその倍(二(ふた)昔)近くなりました。越してきてから数年後にこの街の様子が気に入り写真なども撮った。

そして、前に写真を撮って10年後くらいになるが、最近またこの街を歩きながら観察すると、昔あった建物が壊され空地になっている場所も多く見かけた。この間、街中は毎日の如く通ってきていたはずだが、用事がある場所は限られていて、ただ目にしてきた風景が少し変わると、ここには昔何があったとかとつい考えてしまうことも度々である。

2011年3月11日の東日本大震災の後に街中での変化がかなりあり、街中に多くあった石造りの蔵などがいくつも消えて行った。

その少し前に醤油や酒の醸造所跡に残された赤レンガなども見て回ったこともあったが、この地震

の時にはそれほど大きな影響がなくほっとした記憶があるが、今見て見るとこれらの遺物もいくつかが消えていた。

石岡に来た頃はあまり話題に上らないが結構石蔵の多い町だな！などと考えていて、そのうちにこれらの蔵をリスト化して写真付きで残しておきたいなどの思いが頭に浮かんだが、3・11の震災でその時機を逸してしまったと後悔したことを覚えてる。

しかし、今思えばこれもそれからの10年の間に残されていた蔵もいつの間にか姿が見えなくなった物がいくつもあるようである。

まあ残そうにも、これらの蔵は通りから見える物ばかりではなく、個人の家の庭に在ったりして勝手に写真を撮ることはできない。これこそそれぞれに自治体や商店会などが率先してやってくれたら良いのに・・・などこんなところに呟いてみるが、これも何かむなしくなつてそれ以上に進まない。

私は終戦時前頃から新潟に帰省していた両親のもとで戦後のベビーブーム真っただ中、新潟県（小千谷市）に生まれたが、父の仕事の関係で2〜3歳ころに横浜に引っ越した。引っ越し先は横浜市本牧元町。三溪園の近くに小学1年生までいた。東京都下郊外に狭いながらも都営の住宅を得て小学2年から1駅離れた地元の小学校に通った。まあ団塊の世代の真っただ中にいたから、その小学校も地元育ちの仲間に交じって同じような境遇の友達もたくさんいた。

また、家のすぐ近くに新しい小学校が建設され、小学校5年からそちらに移るようになった。急ごしらえの学校で6年生のいない分校としてスタ

ートであったから、5年生でも最上級生であった。このため2年間最上級生となったおかげで、出来立ての小学校の初代卒業生となったのはいい思い出となった。ただ、小学校は3か所に通ったので、引っ越しのたびにいろいろと楽しいこと・辛いことなど様々な思い出がある。今のこちら石岡市の小学校は統廃合で全く私の経験してきた小学校時代とは逆の現象が起きている。ただ、私の場合は引っ越すたびに今までの友との別れがあつたが、こちらでは学校が無くなつても仲間はそのままで新しい仲間が増えるのだから後々楽しいことも増えるかもしれない。まあそう考えて世の中を見る見方を広げて欲しいものだ。

さて、ここまでは前段で、今回のテーマは「記憶と記録」についてである。

「記憶」を辞書で引くと、「記憶とは、ものと忘れずに覚えていること」とある。そして記憶力がいいとか、悪いとか、暗記は苦手だとか、一度会った人の名前を忘れないなどと云う人も中にいるが、どうも自分の経験からすると、記憶は昔の出来事などを反復しながら記憶の糸が太くなるのではないかと感じている。たとえば、住む家が変わり、小学校も転校して友達も変われば、変わった当初は覚えていても次第に思い出す機会が薄れ記憶もあいまいになつてくる。

これは「ふるさと」という言葉の持つ意味ともつながるが、私が企業に就職して入った会社には、それぞれの出身県による「県人会」などと云う組織がバラバラにあつた。まあ大雑把なルールで中学を卒業した時に所属した「県」がその人の県人会となつていたように思うが、そのルールに従えば東京都が私の県人会であり、ふるさとでもあり

そうなのであるが、全くその気分にはなれなかつたのでどこにも属していなかつた。

石川啄木は、「ふるさとの訛り懐かし停車場の人ごみの中にそれを聴きに行く」と詠っているが、啄木はふるさと（岩手）を追われるようになって来ても生まれ育った故郷がなつかしくなつたのである。26歳でこの世を去つた啄木の「ふるさと」は「訛り」によつてなつかしさを感ずるのであるから、小さい時に生まれ故郷を離れてしまった自分にはこのなつかしきは頭では理解はできるが、実感としてはまだまだ弱いものといえよう。

私も新潟・横浜・東京・茨城と住む場所を点々としてきたが、どこを「ふるさと」と呼んでいいかはわからない。特に東京は訛りがあまりないのだからなつかしさも中くらいなのである。また中学校高校と地元から少し離れた私立の中高一貫校に通つたので友達も分散してしまひあまり「なつかしさ」が弱まつてしまったのかもしれない。

さて、話が少しずれてきたが、ここで言いたいのは「記憶」とは思っているよりも結構曖昧なものであるということである。

今住んでいる石岡の町中を歩いてみても、前にここを通つた時とは違つた建物になったり、急に建物が壊されて新しい別なものが建つたり、空地になつたりすると、特別にその思い入れがないとその前にどのような建物があつたのか、記憶は結構曖昧で、はつきり思い出せないことが多いのである。「はて？ いままで何があつたかな？」となる。日本は島国であり、また多くが大和民族という単一民族に近いので、どうも同胞・同朋意識が強いように思う。元々集落の成立ちを見ても一つの塊として邑が存在し、50軒ほどを集めて郷（Ⅱ里さ

と)とし、これをまたいくつか集めて郡(こおり)が出来て国となるのだから、邑社会の延長で今でもここから抜け出せない。農村地帯ではなおさらである。

私は、仕事の関係でいくつか海外へも出かけたが、日本という狭い国土からいろいろな国に行き、様々な民族と触れ合うと、今迄なんてちっぽけな世界において、つまらぬ「井の中の蛙」精神を持っていたのだろうかという思いにかられたことが時々ではあるがあった。現在グローバル化が叫ばれ、多くの国への行き来も楽になった。日本は優れた民族で、勤勉・優秀で、大和魂は世界に誇る。などと云うのは、否定はしないが他国もよく見て感じて理解して、外国を見下すようなことは決してほしくない。これがまた戦争につながるような気がしてならない。

話がそれだが、街中を歩いてみたりしたが、私の記憶力が弱いのかもしれないが、記憶はどうもあまりまいで建物などがなくなれば思い出すのも容易ではない。また時間が経てば経つほどあまいで、その時期も何か特別な出来事でもあれば別だがほとんど正確には思い出せない。そこで大切なのが記録を残すことである。

「いしおかのお祭り」が何時から始まったのか? いろいろの議論はあるが、結論はいたって単純で、記録が何処まであるかどうかである。どうもこれを無視して願望を持ち込んで「威張りたい」という意識が歴史を塗り替えたり曖昧なものにしてしまう。

石岡(常陸府中)の町には昔「三光の宮」と呼ばれた三つの神社(日天宮、月天宮、星之宮)があったが、この星之宮は現在常陸国総社宮に合祀さ

れているが、江戸時代に毎年祭りの引継ぎに、その前の1年間に起こった町の出来事を書いて引継ぎをしていた。その中に「幕末の安政三年(1856年)1月に府中平村若松町で起こった仇討ち事件」が記録されている。越後(新潟県)新発田藩から母の仇討を願って許可された飯島量平(16歳)の正式な仇討です。何の縁もないこの地で起こった仇討ちもここに書かれていなければきっと歴史の中に忘れ去られて埋もれてしまっていたでしょう。

また江戸時代後期に松浦静山公が隠居後に20年間毎日休むことなく書き続けた「甲子夜話」には身の回りの出来事や、聞いた内容、ためになりそうな資料、妖怪などにまつわる話など実に様々なことが書かれて残されています。このいわば日記、現在で言えばブログ、なども似ています。その内容は実に驚くほどのボリュームがあります。タイトル項目だけでも3700件近くあります。1項目が本1冊分のものでありますのできつと休まずに記録を残し後世に伝えることを思いながらまとめたものなのでしょう。

これも静山公がこの作業を始めたきっかけを知るともう少し理解が深まると思います。

静山公は肥前国平戸藩の藩主でしたが、剣術の腕も立ち、何よりいろいろなものに興味を持ち勉学も大変熱心な方だったといわれています。

1775年に平戸藩の藩主となり、家督を譲った文化3年(1806)からは隠居してそのまま江戸で暮らしており、幕府の大学頭である「林述斎」とは友人でもあり、学問の師でもありました。そこで古代中国などの賢人とされた人物の思想や書き遺したことなどを学びながら、「私はこのような賢

人にはなれそうもないが、何か後世の役に立つことをしたいが、何が良いか?」というような事を問うて、林述斎から勧められたのがこのような記録を書き遺す事だったので。それも来年からなどと云うのではなく、思いついたその日からやるのが良いといわれ、その日が甲子の日であったので題名も「甲子夜話(かつしやわ)」となったのです。今なら辞書が有ったりネットを検索すればかなりの情報が得られますが、この記録に残すと云うのが歴史をゆがめずに正確に後世に伝えることに役立つのです。

ただ、今の世の中は情報が溢れているとはいえず、本当に必要な情報が得られるのか? いつまでその情報は生きていくのか? など意外と落とし穴もあるのです。

石岡の町中の歴史(近代)として私が参考としているものには以下があります。

- ・石岡繁昌記 平野松次郎 明治34年発行 影印版 昭和52年1月 崙書房
- ・茨城県案内 河原井七之助 明治34年発行(国会図書館デジタルアーカイブ)
- ・石岡誌 松倉鶴雄 明治44年発行(国会図書館デジタルアーカイブ)
- ・写真集 いしおか昭和の肖像 写真に見る石岡史研究会 平成6年発行
- ・石岡の今昔 今泉義文遺稿集 昭和58年発行 崙書房
- ・いしおか100物語 いしおか100物語刊行会(茨石商事内) 平成21年発行
- ・石岡の歴史(市政30周年記念) 石岡市史編さん委員会 昭和59年発行
- ・石岡市史 下巻(通史編) 石岡市史編さん委員

会 昭和60年発行

・水戸紀行 正岡子規 講談社版『子規全集』第十三巻(昭和51発行)デジタル版

・香丸町の変遷(明治26〜平成27年)香丸町商店会・ISHOKA SKETCH 石岡市合併10周年記念誌 平成27年10月発行

・角川 日本地名大辞典 8 茨城県 昭和58年発行
・倭名類聚抄 (国会図書館デジタルアーカイブ)

「いしおかのお祭り」を「ユネスコ無形文化遺産」に登録したいなどという話しを以前どこかで聞いたことがあります。これは2016年(平成28)に日本の祭り33件が登録されたことに始まります。この祭りはすべて国の重要無形民俗文化財に指定されたものであり、現在もその後に国の指定となつた4件の追加申請を行っています。このため、「いしおかのお祭り」をユネスコに登録するためには市指定↓県指定↓国指定↓ユネスコ指定 となければなりません。

いま、土橋町の獅子頭が県指定有形民俗文化財、石岡囃子と富田のささらが県指定無形民俗文化財となつており、祭りそのものは「常陸國總社宮祭礼の獅子・山車・ささら行事」として市の無形民俗文化財に令和3年10月に登録されたばかりです。まだまだ先が長いですね。でも本気に推進するならばきちんと記録を整理して毎年残していくことに尽きると思います。今迄の記録もちゃんと整理して残そうとする姿勢が必ず必要になると思っています。



ハスの実

木村 進

常陸国風土記の香島郡のところに

「社の南に郡家がある。北側には沼尾の池がある。古老の話では、ここは、神代に天より流れ来た水がたまつて沼となつたもの。この沼で採れる蓮根は、他では味わえない良い味である。病気の者も、この沼の蓮を食うと、たちどころに癒えるという。鮒や鯉も多い。ここは前に郡(こおり)のあつた所で、橘も多く、その果実は美味しい。」と書かれている。

数日前に仲間と話していて食べたのを『ハスの実』と言ひ間違えたら、「昔は蓮実を食べた」と言つていた。



もしかしたら風土記も「ハスの実」のことを言つていたのかもしれないと思ひ原文をデジタルアーカイブで探して調べた。

「生蓮根味気太異。甘美絶他所之有病者食此沼蓮早差験之。」

と書かれており、やはりこのまま読めば蓮根のことであることではないように思える。でもハスの実も健康にはいいらしい。

水雲問答

(6)

(木村 進)

【はじめに】

松浦静山 甲子夜話 巻39 【1】より

これは江戸時代の(長崎)平戸藩の藩主であつた松浦静山公が晩年の20年間に毎日書き残した随筆集「甲子夜話(かつしやわ)」の中に挿入されている2人(水・雲)の手紙による問答集を理解しようとする試みです。

(30) 無用の用

雲..

此間仰下され候無用之用の累、成程莊周の名言に候。事に物に心掛け、工夫を仕候。近來考へ申候に、天下の事、有用無用もと相持(あいもち)にて、尽(ことごと)く棄つべからず。所謂(いわゆる)棄物棄才なき道理に候。風月詩酒の類も、工夫に付けて多益を得申候こと、夥(おびただ)しきやに存候。鯨を刺すに、利刀は彼の動(うご)き)に従つてぬけ、鉛刀は動に従つて深く入ると承り及び申候て、始めて感悟仕候。大事を做(な)す者は有ると有られぬ者を引込み、時宜に従つて取出し使ひ申候ことと存候。如何如何(いかんいかん)。

(訳)

この間仰せ下さつた「無用の用」の話は、なるほど中国の思想家「莊周」の名言です。いろいろな物事を心掛けて、工夫をしていると、天下の事で、有用無用にかかわらずどんなものでも棄てる

ものがありません。いわゆる「棄物棄才なき道理」です。風月で詩を詠み、酒を愛するといったようなことも、工夫の仕方によっては多くの益を得ることができます。それも少しのことではなくおびただしいものです。鯨（くじら）を刺すのに研ぎすぎた刀を使えば、鯨の動きによって抜けてしまいます。ところがなまくらな刀は鯨が動くと益々深く入っていきます。このことを最初に聞いた時は感動しました。大事をなす者は有りとあらゆる者を引き込み、時宜（じぎ）に従って取り出して使う（活用する）ことだと思えます。如何でしょうか。

水…

此の大手段なきときは、大経論は成りがたかるべくと存候。牛漕・馬勃（ぎゆうしゆうばぼつ）・敗鼓（はいこ）の皮までも貯へたるが良医に候。鶏鳴狗吠（けいめいくばい）の客・門下にあれば、其の用を成候時必ず之れ有り候。然（しか）れどもあるとあらぬ者を引込候にも、少しく弁別なき時は人に誤らるるの患その所より発し申候と存候。

（訳）

この大手段が時は、「大経論（だいきりん）」は成り立ちません（けちけちした方法では、大きな問題の解決は出来ません）。牛漕・馬勃（ぎゆうしゆうばぼつ）牛の小便や馬のくそ…役にたたないつまらないもの。敗鼓（はいこ）破れた太鼓の皮までも貯えて薬とするのが良医でしょう。鶏鳴狗吠（けいめいくばい）鶏の鳴きまねをしたり、犬の吠えるまねをすような客（居候）や門下に

置いておけば、何かの時に役立つことがきつとあるでしょう。しかし、ありとあらゆる者を引き込んで使うには、その見分ける能力が無ければ時には間違いを起こし、禍となるようなことにならないとも限りません。

（31）原泉溝澮（こうかい）

雲…

小子道中にて雨に逢（あい）、雲霧の厚きは雨必ず強く、薄きは必ず微（かすか）なるをみて感ずることあり。基本厚きは必末（すえ）遠し。故君子の学を為すも、博く胸中に蓄積することを務むべし。其物に応て用ゆるとも端倪（たんげい）すべからず。浅露なるときは障支多かるべし。治国の術亦（また）然り。広く衆謀（しゆうぼう）を集めて而（しこう）後作用甚大なり。

（訳）

私が道中で雨にあうとき、雲や霧が厚い（濃い）時は雨が必ず強くなり、薄いときは雨は微かにしか降りません。これを見て感じるのですが、基本として事案も暗雲が濃い時は先が遠いとおもいます。ゆえに君子が学をなすのも、日々、博く知識、学問を自分の胸の中に蓄積するように務めなくてはなりません。知識を物に応用して用いる時も初めから終わりまで安易に推し量るべきではありません。浅露の時は支障が多くあります。治国の方法もまた同じです。広く皆の意見を集めてから行うことは、作用が膨大になります。

水…

これは『孟子』の原泉溝澮（こうかい）に喩（た

と）へたると同一一般の意にして、正面の道理なるばかり、何も發明の所を見ず。

（訳）

この質問は、「孟子」が言った「原泉溝澮（こうかい）の喩え」と同じ内容であり、わかりきった正面の道理でしかありません。何も新しい発見の箇所は見えません。

（コメント）

この孟子の「原泉溝澮（こうかい）の喩え」とは、『孟子』離婁（りろう）章句下にある話で、弟子の徐子が孟子にこう質問しました。

「仲尼（チュウジ…孔子）は、しばしば水について、『水なるかな、水なるかな』と言ったといいますが、水にどんな取り柄があるのでしょうか。」

すると孟子は次のように言いました。

「原泉（水源のある水）は、こんこんと湧き出でて、昼も夜も休みなく流れて、溝澮（こうかい）田圃の大きな溝、小さな溝を満たせば次に進み、全てを満たしていく。およそ本源のあるものは、このようなもので尽きることがない。孔子はただこのことについて感心したのだ。」と

（32）光明正大

雲…

凡そ人は光明正大の四字を自修の符とすべし。悪をなし出す、多くは陰柔幽暗（ゆうあん）の処に於てす。陽光明々の地にしては必ず羞恥（しゆうち）の心を生ず。飲酒放縱の樂（たのしみ）も

昼間に行はれずして、夜陰に行るるが如し。故に大義を作(な)さんと為(す)る者は、光明正大に身を押し出して、我ながら媚弱(びじやく)の業なし出(いだ)されぬやうにして、一箇の術略を以て処世の妙を顕(あらはさ)ば、古人の如く事をなし得べし。

(訳)

およそ人は光明正大の四字を修学の御札とするべきでしょう。悪をはたらくのは、多くの場合陰の暗いところで行うでしょう。陽があたつて明るい場所では羞恥の心が生じます。飲酒したり勝手なことをする楽しみもまた昼間には行われず、夜陰に行われると同じです。そのため、大義を行おうとする者は、光明正大に身を前面に押し出して、自分からいじけたところを出さぬようにして、一種の方法(手段)をもってやっていけば、古人のようになすことができるでしょう。

水..

此の論是(ぜ)なり。ただ立言に病(へい)あり。一ケの術略を以て処世の妙を顕すなど、聞(きこ)へ難きことなり。媚弱の業など何の事とも聞へず。総(すべ)てこれは皆真文にもなく俗文にもなき故、語と意の不都合にて、人を感じずる所なし。やはり答問書などの如く、俗文にしたる方、命意徹底すべし。

(訳)

この論はもつともです。ただ、言葉の表現に不味いところがあります。「一ケの術略を以て処世の妙を顕す」というのは、すこし聞きがたいことで

す。媚弱の業などという事もよくわかりません。これらはすべて、漢文体(真文)にもなく、口語体(俗文)にもそのような表現はありませんので、語と意味が符合せず、人も感じません。やはり答問書などのように俗文(口語体)にした方が、命意が伝わるでしょう。

(33) 君子剛柔の論

雲..

君子は剛を以て世に立つ。小人は柔を以て世を涉(わた)る。小人剛を用ゆれば敗る。君子柔に隠れて世を涉(わた)らんとするときは、必ず讒険(ざんけん)の為に陥(おとしいれ)らるること、古今歴々たり。剛は剛を以て徹底せんこと可なり。少く禍を避るの心有るべからず。然りと雖も言葉を慎むべきなり。

(訳)

君子は剛(自分の強い信念)をもって世にたちます。一方小人は柔(あたりさわりのないよう)に妥協しながら)世を渡ります。もし小人が剛でいこうとすると必ず失敗します。君子が小人のような柔で(妥協しながら)世を渡ろうとすれば、必ず讒言(ざんげん)や陰謀などのために、陥(おとしい)れられてしまうでしょう。これは古今の歴史を見ても明らかです。

そのため、君子は堂々とした態度(剛)で、信念を曲げずに徹底して行うことが大切です。少しの禍をも避けようとする心があつてはなりません。そうはいっても言葉は慎むべきです。

水..

君子剛柔の論、尤も当れり。君子柔を以て破るるなど、尤も微妙の真実論、多く聞かざる所なり。敬服々々。これらの論惜(おしむ)らくは一場の説話となりて、雲烟(えん)消滅、此後かな文の答問書の如くして、その往復冊子になすようになさば、下げ札も亦一時のことになく、骨折(おり)て脱破すべし。高明以て如何と為す。

(訳)

君子剛柔のご意見、ごもつともです。君子が柔(曖昧な妥協)をもって行くと失敗するというのは、最も微妙な真実論であり、あまり聞かないものです。敬服いたしました。これらの論意見)は、惜しい事に、そのとき、その場だけの説話となつてしまい、雲煙(けむり)のように消えてしまします。そのため、これをかな書きの答問書のようにして、これらの往復書簡冊子にしてまとめたら、下げ札などが取れてなくなつてしまえば苦労したのがむだになりますので、一冊に纏めるのが良いとおもいますが如何でしょうか。

(コメント)

このやり取りが結果として現在残った「水雲問答集」となり世に残つたのでしよう。甲子夜話もそうですが、そこに残されたこの水雲問答もここでその経緯が明らかにされています。

(34) 大事、跡あるべからず

雲..

大事をなし出すもの、必ず跡あるべからず。跡あるときは、禍必ず生ず。跡なき工夫いかん。功名を喜ぶの心なくしてなし得べし。

(訳)

大事をなすものは、なにも形跡があつてはなりません。跡があれば禍が必ず生じます。跡を残さぬ工夫はどうしたらよいか。それは巧名を喜ぶ心をなくして無心でやるしかないでしょう。

水…

是も亦是なり。功名を喜ぶの心なきは、問学上の工夫を積(つま)ざれば出来まじ。周公の事業さへ男児分涯のこととする程の量にて、始めて跡なきやうに成るべし。然らざれば跡なきの工夫、黄老(こうろう)清浄(しようじよう)の道の如くなりて、真の道とはなるまじ。細思量(さいししようりよう)。

(訳)

これもまた是(ただしいこと)です。功名を喜ぶ心を持たないというのは、学問上の工夫をよほど積まないとできません。周公(長い安定した王国「周」を建国した人物)の事業さえ、男一匹としてのですべき度量があつて始めて、跡がないようになるでしょう。跡がないようにすることだけに偏つて工夫すると、いわゆる「黄老清浄の道」(中国の戦国時代末期から漢の初期に流行つた、何もしない方が却つて治まるという黄老道)のようになつて、真の道ではなくなります。細かく考えて検討ください。

(35) 始ありて終なき

雲…

凡その事を処置致し候に、終を量り申すべきこと肝要と存申候。左様候者(そうらはば)大過は

之れ無きことと存申候。恐れながら神祖の御事業、小大ともにこの処能々(よくよく)御工夫在為したまひ候ことと存じ奉り候。夫故(よれゆえ)の万世に垂れて、御法崩れ申さず候。豊公杯(など)一時の英主に候得ども、一時を鼓舞する迄にて、この工夫疎(うと)く存候。況(いわん)や凡人は事々物々に心附(こころつけ)申すべきことと存申候。

(訳)

およそ事を実行するときに、その終わりを考えて行うことが肝要と存じます。このように考えますと、大きな問題はないと思われます。恐れながら神祖(家康公)のなされた事業は、大小さまざまな事によくよくこの御工夫がされております。それゆえ、諸国全般に法を執行しても、その法が崩れないのです。豊公(秀吉公)などは、一時の英雄であります。一時において華やかに鼓舞いたしましただけで、この終わりに対する工夫が疎(うと)いためと思われます。ましてや凡人は、その時々々の事や物に執着してしまふことになりましよう。

水…

始ありて終なきは、何事によらず慎むべきの專要に候は申(もうす)に及ばず、高論少しも間然(かんぜん)すべき之無く候。されど初心輩に此のこのみ勤めさせ候はば、一事ごと縮みて、手を下すべきの所無き様にも心得ること有るべきにや。縝密(しんみつ)の者には対症の薬石(やくせき)なるまじく、材幹ありて妄(みだ)りに事を為すことを好むものには、頂上の砭針(へんしん)

ん)なるべし。是等にも限らず、教誠(きようかい)も其人により変通なくて協(かな)はざること多きやに存候。

(訳)

始があつて終わりが無いということは、何事においても慎まなければ成らないのはいうまでもありません。ご意見は欠点などありません。けれども初心者の連中にこの事だけを行わせますと事ある毎に縮みこまつてしまい、手を下すことが無くなつてしまふようにも思われます。縝密(しんみつ)・慎み深い)な者は、病氣に対しての薬石(病氣に対する薬や治療法)の様にもならず、材幹(さいかん)才幹(さいかん)・物事を成し遂げる知恵や能力)があつて、やたらと事を行うことが好きな者には、急所を突いた教訓(戒め)となるでしょう。これらにもかかわらず、教誠(きようかい)・教之戒めること)もその人によつて変化に対応していくことができず叶わないことが多いと思ひます。

(コメント)

頂上の砭針・砭針(へんしん)・お灸の針)で、頂上は頭の上なので、頭の頂上にさすお灸の針…人の急所について強く戒めることをさし、ここでは急所を突いた戒め(教訓)の意。「頂門の一針」と同義語 (続く)



「ふるさと風の会 文庫展」 &

「風のことは絵同好会展」

日時:令和6年10月19日(土)~23日(水)

10:00~18:30 (最終日は15時まで) (入場無料)

場所:石岡市・まちかど情報センター(国府3-1-16)

特別企画:小林幸枝による手話舞講座

日時:10月19日(土)13:30~14:30

- (1) 手話舞(小林幸枝):約10分
- (2) 手話と一緒に歌いましょう 約50分

この手話舞の表現を豊唾者の当会の舞姫である小林幸枝が皆さんと一緒にここに再現してみたいということになりました。どうぞご興味のある方は是非お気軽にご参加ください。

ふるさと風の文庫

会報「ふるさと風」に掲載してきたものを、文庫本に編集し、石岡市まちかど情報センター他で販売しております。お問い合わせは編集事務局へ。



風の会文庫を会場で展示販売しております。皆様のお越しをお待ちいたしております。
(問合せ先:080-3381-0297 木村)

風のことは絵

「風のことは絵」とは、風の景(かけ)を色彩とことば詩(うた)によって表現する石岡に生まれた表現です。



会員のこの一年間の作品をご覧いただき、ご感想など頂けましたらと思います。

ふるさと風の会・風のことは絵同好会

お待ちしております。